



**Data**

監督・脚本: マルクス・H・ローゼンミュラー

出演: デヴィッド・クロス/フレイア・メーバー/ジョン・ヘンショウ/ハリー・メリング/デヴィ・ジョーンズ

### ■■■ショートコメント■■■

◆9月15日の巨人・阪神戦では、巨人軍の菅野投手が、阪神の近本に2本のソロホームランを打たれたものの、6イニングを3点に抑え、結果は6-3で勝利した。そして、菅野はスタルヒンの11連勝を抜き、巨人軍初の開幕連勝記録を12とした。阪神ファンの私は率直には喜べないが、それでも、やっぱりおめでとう！

そんな日に本作を観たが、サッカーに疎い私は、巨人軍の伝説的ヒーローであるスタルヒンは知っていても、元ナチス兵で連合国側の捕虜になりながら、イギリスのサッカーチーム「マンチェスター・シティ」のゴールキーパー（GK）として素晴らしい活躍をした男バート・トラウトマンのことは全く知らなかった。

本作冒頭は、息詰まる戦闘シーンが少し見られるが、その直後にはすぐ捕虜収容所のシークエンスに。

◆『大脱走』（63年）では、スティーブ・マックイーン扮する野球が大好きなバージル・ヒルツは、独房内でボールを壁にぶつけることしかできなかったが、本作は捕虜収容所の中で、バート（デヴィッド・クロス）のゴールキーパーとしての実力が発揮されるシーンが登場するので、それに注目！そして、地元のサッカーチームの監督ジャック・フライアー（ジョン・ヘンショウ）が連敗続きのチームを救うため、恥も外聞もなくナチスドイツの捕虜になっているこの男を担ぎ出すところから、物語がスタートしていく。この頑固おやじには、勝気な美しい娘マーガレット（フレイア・メーバー）がいたから、本作では彼のチームの上昇ストーリーと共に、当初は敵対していた若い男女の恋愛ストーリーが同時平行で描かれていく。なるほど、なるほど・・・。

◆そんなバートの活躍にマンチェスター・シティの監督が目をつけたところから、物語は次の段階へ。しかし、入団の記者会見では、若くしてナチス兵士になった彼がどのようにしてゴールキーパーの実力を身に着けたのか等の質問も出されたが、大半は「鉄十字勲

章を受けたと聞いたが？」等のサッカーとは無関係な“意地悪質問”に終始した。そのため、翌日の新聞には「戦争責任を言い逃れ」というセンセーショナルな見出しが躍ることに。そして、バートが出場した試合はブーイングの嵐に。それに反論したのが、今はバートの妻になっているマーガレットだが、その効果は？

本作を観ていると、ゴールキーパーがほとんどのシュートを跳ね返している姿に驚くが、こりゃちょっとやりすぎ・・・？それはともかく、バートが最も輝いたのは、1956年のFAカップ決勝戦らしい。前年の決勝戦で敗北していたマンチェスター・シティは、必勝を期して優勢に試合を進めていたが、対戦相手の選手の膝が首に激しく食い込んだバートは、試合の半ばで倒れてしまうことに。さあ、バートは立ち上がれるの？

本作には、「Based On A True Story」の字幕は表示されないが、この決勝戦での奇跡的な彼の活躍は、実話らしいので、それに注目！

◆すべてが順風満帆だったバートの人生も、首のケガによって大きな転機を！そんな状況下、入院中のバートがマーガレットと電話をしている時に、5歳になった息子ジョンが、車に引かれて死んでしまう不幸に。さあ、残された2人はどうなるの？

マルクス・H・ローゼンミュラー監督のインタビューによると、本作のテーマは「罪、許し、そして和解」。それを直接アピールするシーンも多いが、本作のメインテーマにはもう1つ、「バートがウクライナでユダヤ人殺害を隠れて目撃した時、何もできなかった」という体験があるらしい。本作では、それが時折チラリ、ホラリと提示されるので、その意味をしっかりと確認したい。

◆ちなみに、バートは1964年に引退した後、マネージャーやコーチとしても活躍し、ドイツの鉄十字勲章と大英帝国勲章を持つ唯一の人となったうえ、2013年に83歳で死亡したというからすごい。すると、本作であれほどバートを支えていた妻マーガレットも、ともに白髪が生えるまでずっと・・・。

そう思っていたが、本作ではあえてその点に触れていない。そこでパンフレットを読むと、何と彼は1971年にマーガレットと離婚したらしい。長男ジョンは5歳で失ったが、その後この夫婦は2人の息子にも恵まれたそうだから、2人の離婚原因は一体ナニ？それは本作で全く描かれないうえ、ラストの字幕でも離婚の事実は一切表示されなかったから、アレ・・・。これでは、『キーパー ある兵士の奇跡』はあまりにキレイゴトにすぎるのでは・・・？

2020（令和2）年9月22日記